



地界觀としての地觀

View of Earth as the Earthly Realm

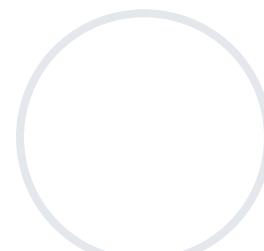
研究の概要および 目的

■ 研究背景

大巡思想の天観(天観)と地観(地観)に対する現代的意義の考察地
に対する観点としての地界観が持つ思想的哲学的重要性

■ 研究目的

大巡思想の地界観の分析および東学思想などとの比較研究近代性
・解冤相生など主要議題を通じた地界観の現代的意義の導出人身
降世と天地公事の地界観的側面の考察



大巡思想と東学思想の地観(地観)の比較

大巡思想の地観

- 具体的神明界(神明界)を包含
- 実体的地界(地界)として表現
- 九天の下の天地概念の包括
- 地は神明で構成された形体を持つ代表的存在

東学思想の地観

- 無為而化(無爲而化)の強調
- 気化(氣化)、造化など見えない実体として表現
- 九天の下の天地概念の包括
- 抽象的原理で地観を説明

両思想の地界包括性と相違点

両思想はいずれも多重的地観を持つが、大巡思想は神明界を含む地界として具体化して表現し、東学思想は目に見えぬ実体と原理として地観を説明する。大巡思想の地観は人身降世を通じて属性と実体の二つの性格を同時に持つに至った特徴を有する。

*『典経』「公事」3-5、「行録」4-17など関連根拠を参照

人身降世と朝鮮選択の背景

人神降世(人神降世)の概念

- 九天(九天)の上帝が人間の身体で世に降臨する現象属
- 性と実体の二つの性格を同時に持つに至る
- 天地の度数を調整し、万古の神明を調和するための降臨人
- 間世界において天地公事を行うための必須の前提条件

朝鮮が選ばれた理由

無名の弱小民族の解冤

「惨禍の中に埋もれた無名の弱小民族をまず助け、万古に積もった怨を解いてやろうとするためである。」

「無自欺」概念と大巡思想の相生が結びつく地点についても、すでに西洋哲学の観点から研究されたことがある。金泰洙, 「大巡思想の無自欺(無自欺)に現れた相生倫理-カントとミルの倫理観との対比を中心に」『大巡思想論叢』27, 2016.

人身降世に始まる大巡思想の地界観は、地を神明から成る実体とみなし、朝鮮の選択は歴史的背景とともに、天地公事を通じた世界秩序再編の出発点となる。

神明憂侍の伝統

「朝鮮のように神明を厚くもてなす所はこの世にない」

『典経』「教法」3-22

三神山の聖地(聖地)

「蓬莱山・瀛洲山・方丈山の三山が、三神山と呼ばれてきた所である。」

『典経』「行録」1-2

天地公事と地界觀の成立

天地公事と

- は
- 世界秩序再編のための神祕的公事
 - 解冤によって万古の神明を調和
 - 天地の度数を調整して仙境を樹立
 - 神明を通じた地の変化の始まり

地界觀の成立過程

- 九天の人身降世から始まる
- 九天が東土に至り朝鮮に降世
- 三神山(蓬萊山・瀛洲山・方丈山)の聖地的意味
- 天界と地界の陰陽合徳の具現

原始返本(原始返本)の原理

天地公事において地界觀成立の核心原理であり、世界の根源に立ち返ることを意味する。姜(姜)姓がその務めを担うことになった根拠であり、朝鮮において人身降世がなされた原理的背景である。原始返本の原理により、地の中心である三神山のある朝鮮が天地公事の舞台となり、地界觀は天地公事を通じて実質的な形を持つに至る。

「この世に姓としては風(風)姓が先にあったが伝わってこず.....その次は姜(姜)姓が出たのであり、すなわち姓の元始となる。ゆえに開闢の時代を迎え原始返本となるため、姜(姜)姓が務めを担うこととなった。」

- 『典經』 「行録」 4-17

*『典經』「公事」3-5、「予示」29、「行録」1-2など関連根拠を

解冤思想と地界観の関係

● 解冤(解冤)の意味

怨と恨(恨)を解いて根本的問題を解消する、大巡思想の核心原理

「今や解冤時代を迎えたゆえ、名もなかった人も氣勢を得、捨てられていた地にも気運が戻ってこよう。」(『典経』「教法」1-67) 天地の度数を調整し、万古の神明を調和する過程において、解冤は必須の過程

東学の失敗の原

因

- 解冤思想の不在
- 国際情勢への理解の不足
- ガトリング銃(Gatling Gun)など西欧兵器に対する
- 認識の欠如 全国的規模の蜂起であったが戦略的準備の不十分

地界観と解冤の連携

地の解冤は天地公事のうち解冤公事の主要な趣旨であり、人身降世が朝鮮でなされた理由と深く関連する。大巡思想は地界観を通じて過去の解冤なき西欧の近代性を克服し、真の自生的近代性の原理を提示する。地界観は天界観に比して相対的に怨(冤)が多い領域であり、人身降世を通じて解冤の場(場)として作用する。

*『典経』「公事」3-5、「教法」1-67、「権之」1-11など関連箇所を

大巡思想の真東学化

- 「わたしに従う者は永遠の福祿を得て不老不死し、永遠の仙境の楽を享受するだろう。これこそが参東学である。」(『典経』「権之」1-11)
- 解冤思想の導入で東学の限界を克服
- 天地公事を通じた実質的変化の追求

大巡思想の地界観の近代性

代替的近代性解冤と相生の原理

- 西欧近代性過去の廃棄、未来志向的展望中心 大巡思想
- の近代性過去の解冤を通じた相生的未来の構築 地界観
- から出発する自生的近代性の模索

韓国近代化との関連性

- 天地公事の開始時期GNP世界最下位水準であった韓国
- 植民地経験国のうち唯一達成した三重近代化:

政治的
民主化

経済的
産業化

文化的
先進化

「真の近代性は解冤から始まるというのが大巡思想に現れた自生的近代性の原理であり、これは天界観に比して相対的に怨が多い地界観から始まり、人身降世以降にのみ可能なものであった。」

*『典経』の関連箇所を参照した

結論および示唆点

▲ 大巡思想の地界観の学術的・社会的意義

人身降世を通じた形而上学的地界と形而下学的地界の統合的理解 原始返

本の原理が適用された地界観の特殊性と現代的再解釈

韓国近代化過程に現れた地界観の実質的影響力の考察

-
-

▲ 東アジア思想の地平の拡大

- 天地公事を通じた東アジア地界観の新たな解釈の提示
- 東学と大巡思想の地観の比較を通じた韓国宗教思想の特殊性の再発
- 見 西欧近代性に対する代案的思惟体系としての可能性の模索

▲ 解冤・相生の現代的価値の提言

地界観に込められた解冤・相生の原理は、現代社会の葛藤解消と共存方策として再照明される必要があり、過去の怨に対する解決なく未来へのみ進む西欧近代性の限界を克服する代案的パラダイムとして作用しうる。

*『典経』の関連箇所を中心に整理された解釈である